

● 堀内 香里 特定助教

Kaori HORIUCHI (Program-Specific Assistant Professor)

研究課題：近世モンゴル遊牧民社会における家族とジェンダー規範

(Family and gender norms in early modern nomadic pastoral Mongolian society)

専門分野：歴史学 (History)

受入先部局：文学研究科 (Graduate School of Letters)

前職の機関名：日本学術振興会 (Japan Society for the Promotion of Science)



私は前近代モンゴル遊牧民社会における人々の暮らしに 관심を寄せてきました。特に18世紀以降は彼ら自身が記した史料も大量に残っており、その生活が垣間見ることができます。ただし、モンゴル国の公文書館が広く外国人研究者らにも公開されたのは1990年代以降であり、また研究者の数も多くなく、それゆえ豊富な資料がありながらも彼らの生活については殆ど解明されていません。そうしたなか、私はこれまでにモンゴルの遊牧民たちが移動をしながら普段如何に管理されていたのかを、彼らの日常に注目して研究してきました。

しかしながら、こうした管理体制の基本単位は成年男子であったために、そこでは子や女性、老人らの居場所が整合的に説明されないままでした。そこで、白眉プロジェクトでは、当該遊牧民社会の「家族」に注目し、各人にとっての「家族」とは何であり、誰であったのか、またそれが期待された役割や規範は何であったのかを明らかにすることで、前近代における内陸アジア遊牧民の生活や家族について考察したいと思っています。

I have long been interested in the lives of people in premodern Mongolian nomadic pastoral society. From the eighteenth century onwards, a substantial corpus of historical records authored by the Mongols themselves has been preserved, providing valuable glimpses into their everyday existence. The National Archives of Mongolia only became broadly accessible to foreign researchers in the 1990s, and the number of scholars working in this field remains limited. Consequently, despite the abundance of primary sources, the everyday lives of Mongols during this period have largely remained unexplored. Against this backdrop, my research has examined how herders in Mongolia were managed within administrative systems while maintaining their pastoral mobility, with particular attention to the practicalities of their daily lives.

As the adult male was the fundamental unit of this administrative system, the positions of children, women, and the elderly have largely remained unaccounted for. In response, my research within the Hakubi Project focuses on the concept of 'family' in this society, exploring how the notion of family was understood and defined differently by each individual, who they regarded as family, and what roles and norms were expected of each family member. Through this inquiry, I seek to examine the lives and family structures of pastoral nomads in premodern Inner Asia.

—ユニークな歴史をもつモンゴル

モンゴルの歴史といえば真っ先に想起されるのは13世紀に築いた未曾有の大帝国でしょう。しかし、その後の歴史に関してはあまり知られていません。14世紀に明朝が建国されると、モンゴルたちは北に「帰り」ました。この元朝を継承したモンゴル政権は「北元」とも呼ばれます。17世紀にはいるとモンゴルの王族たちはその属民を率いて次々にマンチュに服属し、以降モンゴルは清朝の支配下に置かれます。1911年末、モンゴル北部に住んでいたハルハ部を中心に、活仏をハ

ンとする「モンゴル国（ボクト政権）」が作られ清朝から独立しますが、間もなくして1920年代にはソ連の下でモンゴル人民共和国が建てられました。これは世界で二番目の社会主義国家となりました。この体制もペレストロイカの波に乗って1990年代には崩壊し、現在のモンゴル国が成立します。一方、モンゴル南部でも「自治」が模索されました。一方、モンゴル南部でも「自治」が模索されました。1947年に中国共産党の下で内蒙古自治区が設置され、1949年の中華人民共和国建国を経て現在まで中国の一部として位置づけられています。

1920年代の社会主義化はモンゴル社会に大きな変化をもたらしました。その一つは身分制の廃止です（内モンゴルでは1940年代まで続きました）。それまでモンゴルの社会構造はチンギス・カンの時代から続く王族とその世襲的属民を基盤としていました。それは清朝の支配下に入っても、またチベットから来た活仏をハーンにした「モンゴル国」においても維持されていました。私の研究は、この社会主義よりも前の、貴族や平民といった法的身分のあった時代を対象にします。

—モンゴル史研究の現状

歴史研究は史料の残存状況に依存します。確かに、モンゴル人自らが書き残した史料は中国や日本などと比べると圧倒的に少ないので実情です。しかし、清代以降については、文書行政が広く行われていたこともあり、現地一次史料が多く残っています。こうした文書の多くはモンゴルの公文書館に保管されており、モンゴル人民共和国時代には国内やソ連等の研究者だけが実見できました。我々がモンゴルにてこれらのアーカイブにアクセスできるようになったのは1990年代以降のことです。これによって、清朝時代やボクト政権時代に関する歴史研究は益々活発化し、その成果は今世紀に入ってから徐々に公表され、それまでの理解が見直されつつあります。

しかしながら、研究の蓄積は未だ十分とは言えず、とりわけ政治史や制度史を中心するために、歴史に登場するのは大抵成年男子に限られ、子や女性、高齢

者がその周縁に置き去りにされていることは否めません。豊富に残されたモンゴル人自身による記録をもとに、これまで周縁化されてきた人々を含めた歴史叙述を試みることが、私の研究目標です。

—史料からモンゴル人の生活を探る

モンゴルの現地一次史料を丹念に読み込むと、人々の生活の様子が生き生きと伝わってきます。これまでに私は、水草のために移動を余儀なくされるモンゴル遊牧民を日常的に如何に管理し、行政的に統治していたのかについて考察してきました。そのなかで、貴族とその属民が常に近接して暮らすことで集団となって存在すると同時に、他集団との混住を避けることで各集団の排他的な住空間が維持されていたことを明らかにしました。したがって、彼らが遊牧移動をすれば、それに合わせてその集団の住空間も移動したのです。モンゴル遊牧民社会ではこうした「動く境界」を維持することで、行政管理を円滑に行っていました。しかし、この研究においても依然として中心となるのは貴族とその属民、すなわち成人男性であり、実際には共に移動していたであろう子ども、女性、高齢者の姿は見えにくいままでした。

そこで私は「家族」にスポットを当てることにしました。まず着目したのは冊子と呼ばれる、役場に保管されていた帳簿で、そこには戸の構成や各人の年齢、彼らが持つ家畜数が登録されています。それを定量的に分析します。同時に、摺子と呼ばれる役所の間または個人と役所との間を往来した文書を使って、出産、養子縁組、婚姻、離婚、看病、介護、死など家族が関与したと考えられる事案を定性的に考察します。こうした両面からのアプローチを通して、貴族と平民の統属関係が存在した時代におけるモンゴルの家族を定義することを試みます。



モンゴル国立中央公文書館